ヴァチカン便り（59）

「世界平和の祈りの会」の閉会式で講話

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

「世界平和の祈りの会」の閉会式で講話

法王フランチェスコは、10月23日から25日までローマで開かれた聖エジディオ共同体主催の「世界宗教者による平和の祈りの大会」の閉会式に参加した。法王はコロッセウム内でのキリスト教徒による平和の祈りに参加し、その後コロッセウム外の「大会」の閉会式に臨んだ。外部には諸宗教の代表者たちが法王を待ち、歓迎の拍手が巻き起こった。

法王は講話の中で、ロシアによるウクライナ侵攻の問題を取り上げ、第3次世界大戦や核戦争の危機を訴えた。戦争を悪とし、停戦を願い、神に平和をもたらしてくれることを希求し、我々人類は一心に平和を祈ろうと、世界の諸宗教の代表者たちに向けて一致団結を呼びかけた。

「戦争は政治と人間性の失敗を意味する。恥ずべき行為であり、悪の力に対する敗北である、20世紀の2度の大戦からの教訓が何も生きていないのだ」。多くの宗教の代表者、何人かの枢機卿に混じって、ロシア正教ナンバー2のアントニー氏がいたが、どういう心境だったろうか。「大会」は「平和宣言」で幕を閉じた。

大会を受け入れたローマは、今日も永遠の都であることを示し、人々を歓迎し、包容し協力しようという雰囲気で満たされた。この寛容さは、来るべき2025年の「聖年」に引き継がれることだろう。

カザフスタンでのキリスト教各派の集会で

ウクライナ訪問の話がなかなか実現しない中、9月13日から開かれたカザフスタンでのキリスト教各派の代表者の集会に、ローマ法王も出席した。法王は15日にはローマに戻ってきたが、この集いには余り実りがなかったようだ。ローマへの帰りの飛行機の中での、記者団との恒例の質疑応答にもそれがはっきりと現れている。質疑応答で最も時間を割いたのがウクライナ侵攻の問題、次にイタリアの政界について、3番目が中国との関係である。ウクライナ侵攻については、法王は戦争を始めた国と対話をするのは難しいと述べるにとどまった。「国連はこの70年間、平和について話し合ってきた。しかし、今世界にはいくつもの戦争がある。1945年、第2次世界大戦が終わった時、私の母は嬉しくて泣いた。今、平和のために泣ける人は、どれぐらいいるだろうか。戦争を開始した国の責任者と対話をするのは難しいことだ。今のロシアを見て、それはすぐにわかる。しかし、戦争停止のための努力は必要だ。」

イタリアの政情については、法王は政治に関係しないと言っている。「今まで政治家の中では、前大統領ナポリターノと現大統領マッタレッラを知っているのみだ。両者とも優秀な政治家だ。」

中国との関係についてはこう述べた。「中国を理解するには1世紀はかかると思う。しかし、我々は1世紀も生きられない。我々は対話の道を選んだが、中国人の考え方を理解するのは難しい。しかし、対話を、少しずつでも前進させていく必要がある。彼らにも敬意を払うべきだ。」

中国との外交状況

ヴァチカンと中国との暫定的外交処置は、4年前の条約が2022年10月に切れるために、その更新に向けた交渉が続いていたが、さらに現状のまま、2024年10月22日まで2年間継続されると決まった。一番大きな課題は、法王の司教任命権についてである。世界の司教任命権はローマ法王が持っているが、中国だけはそれが通らず、中国政府の決めることになっている。現在の中国では、カソリックはいまだ公認されていないが、教区教会が98カ所、一般教会が4,202カ所。他の活動地が2,238カ所ある。司教は66人である。これは、ヴァチカンによって明らかにされている数の3分の1である。条約はこの4年間、何も修正されていない。2022年5月香港で逮捕され、今でも裁判が継続中の枢機卿ジョセフ・ゼンの問題もある。「中国との対話は難しいが、忍耐を失ってはならない。時間をかけて対話を進めなければならない。」と法王は述べた。

世界の120カ国の若者との出会い

「地球は今燃えている。いろいろな面で地球を変えるのは今だ」。法王は、世界中から集まった数千人の若者たちに、「互いに落ち着いて話し合うよう努めなさい。」と話しかけた。彼らは世界の120カ国から集まった。これは聖フランチェスコの経済観に基づいた3回目の集会である。この集会は、4年前、現法王が発足させた。聖フランチェスコの「世界経済の変貌」に沿って資本主義が展開することを法王は期待する。そのためには「進歩のモデル」を検証し、またこれ以上の命が犠牲にならないよう努力しなければならない。聖フランチェスコの理念に啓発された経済活動とは「貧しい人々」を中心に置くことだ。だから、「貧者を見捨ててはいけない。今の我々の資本主義は貧者を助けてはいるが、貧者を尊敬してはいない。」と法王は述べた。

地震の地・アクイラへ

去る2009年4月6日に起きた地震により、震源地アクイラでは300人が亡くなっている。法王は8月27日、ローマから東へ100㎞の町アクイラを訪れた。復興活動に従事する人々を励まし、勇気のメッセージを与えるためである。法王は祈りの集会で、最前列に座った犠牲者の親族に対して、アブルッツォ地方の方言で見舞いの言葉を述べ、イタリア語に切り替えて、さらに勇気を持って前進しようと訴えた。そのあとヘルメットを被り、車椅子でドゥオーモの中に入り、復元中の教会内を見て回り、「地震で傷ついたところを早く癒してやってほしい。」と語った。法王は「聖なる扉」を通る時、車椅子から立ち上がったが、その扉を通過するのが苦しそうだった。膝の痛みがさらにひどくなっているようだ。この「聖なる扉」は各地の教会の「聖なる扉」より古い形式で、1294年に法王チェレスティーノ5世によって定められた。このことは「神曲」を書いたダンテの叙述の中にも見られ、法王はそれを擁護している。チェレスティーノ5世はアクイラに埋葬されている。「かの法王は聖なる貧の教会を尊び、権力の横暴から自由の教会を守った。私は貧しい教会と貧しい人々のための教会を切望している。我々は息子たちのために、孫たちのために、未来のために働いているのだ」と法王は述べた。